

文字・表記 (理論・現代)

土屋 信一

この項では、日本語の文字・表記に関する理論的研究、文字（主として漢字）に関する研究、および現代（明治以後）の表記の変化と実態に関する調査・研究を取り上げる。

この二年間の業績として、まず取り上げなければならないのは、次の三点の著作である。

① 小泉保『日本語の正書法』（大修館書店、昭53・5）

② 樺島忠夫『日本の文字——表記体系を考える——』（岩波書店、昭54・2）

③ 武部良明『日本語の表記』（角川書店、昭54・12）

①は「正書法」を「ある言語社会が規範として定めた、その言語の書き表わし方」と見なし、現代仮名づかいこそ現在の正書法であると考え、生成音韻論の立場から、現代表記を理論づける。すでに他書にしばしば引用され、今後に大きな影響を与えていくものと思われる。②は、漢字・ひらがな・カタカナ等を使った、複雑な、日本語の表記を体系づけ、いくつかの法則をみちびく。①が「二世紀初め日本人は漢字をどこまでも維持していくのか、それとも表音化するのか決断を迫られることになるであろう。」（「おわりに」より）との見通しに立ち、表音文字の理論づけに力を注ぎ、漢字と仮名と

の関わりあいにはあまり触れないのに対し、②は「漢字の勢力は次第に失われるだろうが、その速度に影響を与えるのは、片仮名の使用ではないか」（10章「日本語表記のこれから」より）と考え、漢字仮名交り文中における片仮名の効果に注目している。②は新書判という制約のため、十分に論じられていないところ、さらに先が聞きたいところもあるが、あとは各自が考えろということなのかも知れない。今後に大きな影響を与える著作と言えよう。

④は①・②と異なり、現代の国語表記の実態と問題点を、国語施策の側から述べたものである。「小辞典シリーズ」の中の一冊だが、辞典という印象は与えない。公的な文章の表記の基準が、解説をまじえて、ていねいに記述されている。

このほか、表記法全般に及ぶ大きな研究はなかった。また、大きな表記調査・漢字調査の報告もなかった。ただ、④北原保雄・徳川宗賢・野村雅昭・前田富祺・山口佳紀『国語学研究法』（武蔵野書院、昭53・2）の第二章「文字・表記」が、大学の教材ではあるがいろいろ示唆に富む内容であること、他の項目の担当者によって取り上げられるだろうが、⑥山田俊雄『漢語研究上の一問題——仮名書きの場合の同定 (Identification) について、特に「年はい」について——』（成城国

文学論集』十、昭53・3)と、⑥小松英雄『いろはうた——日本語史へのいざなぎ——』(中央公論社、昭54・11)には、文字・表記に対する確かな考え方が随所に示されていることを指摘しておきたい。

また、⑦山中光一『日本語文字システムのモデル的考察』(科学研究費特定研究「言語」「計算機による日本語文字システムの実用処理」研究報告資料、昭54・3)は、表記のモデル論として、大変興味深い。ただ、このA5版38ページのパンフレットは、科研費の報告資料のため、部外者には入手しがたく、私もコピーの、またコピーを読んだ。なお、科研費特定研究「言語」は52年度から54年度まで三百数十名の研究者を集集して行われたが、四四課題のうち課題名に「文字」の含まれるものには、⑦のほか、「文字表現力と音声表現力との関連」(代表者林四郎)・「漢字、アルファベット等、文字システムの言語形成・思考に及ぼす影響の研究」(代表者橋本萬太郎)があり、このほかに、教育・工学方面の研究者が、多数、文字表記に取り組んでいるようだ。55年春には多くの成果が発表されるだろう。

表記に関する理論的な研究、現代語の表記の記述的研究としては、次のものが発表された。⑧服部四郎『新版音韻論と正書法——新日本式つづり方の提唱——』(大修館書店、昭54・12)、⑨川上素『国語教育における仮名づかいと音声表記』、『音声学会会報』160、昭54・4)、⑩斎賀秀夫「表記法の移り変わり」(朝日選書)ことばの昭和史』(昭53・1)所収)、⑪宮島達夫・高木翠「雑誌九十種資料の漢語表記」(国語研報告62『研究報告集』1、昭53・3)、⑫文化庁国語課編『言葉に関する問答集』4(文化庁、昭53・3)、⑬進藤咲子「福

沢諭吉研究ノート(2)』(『東京女子大学論集』29—1、昭53・9)、⑭鈴木寿乃「郵便切手に見る「記念」・「記念」」(『大妻国文』10、昭54・3)、⑮天沼寧「記念・記念」(『大妻国文』10、昭54・3)、⑯清水勝昭「動詞の表記について——語句指導の手がかりを求めて——」(『国語表現論叢』、昭54・5)、⑰竹浪聰「本字学生」の国語表記の実態——読解を妨げるもの——』(『流通経済大論集』12—4、昭53・3)、⑱松岡洗司「大学生に対する漢字力調査」(『国文学論集』)ハ上智大V11、昭53・1)

⑩は旧版に論文三篇を加えたもの、⑪は、漢語がどのような条件で仮名書きされるかを分析記述したもの、⑫は主として国語表記に関する疑問に答えたもの、⑬は漢字平がな交じり総振りがなの文章の表記の性格を分析したもの、⑭⑮は語史であり表記史とも言えるもの、⑯⑰⑱は教育の現場における表記の問題を取り上げたものである。このほかに、翻訳として、⑲A・コンドラート著、磯谷孝・石井哲士朗訳『文字学の現在』(勤草書房、昭54・12)があったことを付け加える。

外来語および外国の人名地名の表記について、いくつかの研究があった。⑲宛字外来語辞典編集委員会編『宛字外来語辞典』(柏書房、昭54・11)、⑳教科書研究センター編著『地名表記の手引』(ぎょうせい、昭53・11)、㉑菅野謙・白田弘「ギリシア」としてふてふて放送で使う外国地名の発音と表記」(『NHK文研月報』昭53・7)、㉒中曾根仁「絵本の外来語の表記について——長音をもつ語の場合——」(『読書科学』83・84、昭54・3)、㉓石綿敏雄「外国地名表記の問題点」(『言語生活』37、昭54・3)

⑳は近世・近代の資料から外国の人名・地名・外来語（一部は和語も）を取り出し、漢字の画数順に配列したもので、編集者名は明らかにされていないが、ユニークなものである。なお、これも無署名だが、㉔百科問答「外国地名の漢字による当て字表記」『月刊百科』199、昭54・4のあったことを付け加える。㉔は二〇冊の総本の調査報告で、㉔は㉔を材料として問題点を論じたものである。

句読点・ルビ等については、次の研究があった。㉔大類雅敏『文体としての句読点』（栄光出版社、昭53・2）、㉔大類雅敏『日本文学における句読法』（栄光出版社、昭53・5）、㉔大類雅敏『句読点活用辞典』（栄光出版社、昭54・2）、㉔杉本つとむ『日本語講座4「語彙と句読法」』（桜楓社、昭54・9）、㉔川口明美『「春琴抄」への文体論的接近——表記法と語彙——』（『立正大国語国文』14、昭53・3）、㉔高橋弥守彦「標点符号の研究——その2——」（『大東文化大学紀要』人文科学17、昭54・3）、㉔「同一その3」（『大東文化大学紀要』人文科学16、昭53・3）、㉔栗田靖「碧梧桐とルビ俳句」（『東海学園国語国文』13、昭53・3）

㉔㉔㉔は句読点の打ち方と効果についての詳細な論考で、㉔は句読法についての史的考察三編を含む。㉔㉔㉔は文学研究であるが、㉔は、極力句読点を省略した「春琴抄」の句読法から文体を論じたもの、㉔は碧梧桐の特殊なルビを付した俳句の展開の過程を追ひ、その理論を述べたものである。㉔㉔㉔は現代中国語の句読法を研究したものである。

次に、漢字に関する研究を取り上げる。漢字については、その歴史に関するもの、現代の用法に関するもの、音訓・字体・筆順に関

するもの、漢字教育・教養に関するもの、および国語政策に関するものと多方面にわたり、数も多く、ここで取り上げた文字表記の研究の半分を占めている。

漢字の成り立ちに関する研究としては、次のものがあった。㉔中沢希男『漢字漢語概説』（教育出版、昭53・2）、㉔鈴木修次『漢字』（講談社、昭53・2）、㉔白川静『漢字百話』（中央公論社、昭53・4）、㉔鈴木修次『漢字の知恵』（『月刊ことば』、昭54・1）

現代の漢字の用法については、㉔林四郎『言語行動の諸相』（明治書院、昭53・3）の「IV漢字に関する論」にまとめられた、「語彙調査四種の使用度による漢字のグループ分け」「現代語と漢字」「現代漢字の役割」「漢字使用の基底構造」の四編、および㉔林四郎『漢字研究の一視点』（『文芸言語研究』言語篇2、昭53・3）があった。㉔は最後の一編を除きすでに発表されていたものだが、使用度による漢字のグループ分けは、国語審議会が「新漢字表試案」を作成するにあたって、大いに役立てられたと聞く。

漢字の音訓・字体・筆順に関しては、次のように多くの論考が発表された。㉔白藤礼幸「音と訓の文化」（『月刊ことば』、昭54・3）、㉔相原林司「漢字の読み方に関する調査研究(1)」（『文芸言語研究』言語篇3、昭54・3）、㉔武部良明「漢字の読み方について」（『講座日本語教育』15分冊、昭54・6）、㉔柿本実「漢字の音訓に関する調査」（『新大國語』5、昭54・3）、㉔野村雅昭・伊藤菊子「漢字の表音度」（『計量国語学』11—7、昭53・12）、㉔伊藤菊子「形声文字と漢字指導」（『言語生活』326、昭54・2）、㉔杉本つとむ『日本語講座1「異体字とは何か」』（桜楓社、昭53・12）、㉔小林一仁「現代の国語における漢字「字形」変形の諸問題」（『文芸言語研究』

言語篇3、昭54・3)、⁴⁸原田種成「小学校の「標準字体」を批判する」(『言語生活』233、昭53・11)、⁴⁹宮島達夫「新字体の画数」(『計量国語学』11-7、昭53・12)、⁵⁰林輝夫「字形を大切にする漢字指導—漢字書き取り調査を行って—」(『国文研究と教育』八奈良教育大V2、昭53・8)、⁵¹水上静夫「漢字教育の理論と実際—書体」(『語学と文学』八群馬大語文学会V19、昭53・7)、⁵²菅原義三「小学国字考」(昭53・4)、⁵³天沼寧「女」という字の形について」(『大妻国文』9、昭53・3)、⁵⁴藤原宏編『漢字書き順字典』(第一法規出版、昭54・3)、⁵⁵堀口純子「テレビによる漢字の筆順テスト」(『日本語教育』34、昭53・2)、⁵⁶富田富貴雄「漢字の筆順指導試験(上)」(『鳥取大学教育学部研究報告』教育学科20-2、昭53・12)、⁵⁷富田富貴雄「同(下)」(『同教育学科』21-1、昭54・7)、⁵⁸小林一仁「教育漢字」再検討ノート(『文芸言語研究』言語篇2、昭53・3)、⁵⁹三浦男二「教育漢字の学年別配当表」を評す—「漢字の教育が適切に行われる」よう—」(『言語生活』334、昭54・10)、⁶⁰谷川英則「漢字指導の基点について」(『香川大学国文研究』4、昭54・9)、⁶¹たかはしたろう「漢字の体系的指導について」(『教育国語』59、昭54・12)

右のうち、⁴⁶は七章から成り、著者は「わたしの文字論であり漢字論である」(あとがき)と述べている。⁵²は国字を五百余字集めたものである。

国語教育界だけでなく、外国人に対する日本語教育の分野でも、漢字指導は大きな問題で、『日本語教育』36号(昭54・2)は、特集「文字を書く」として、⁶²林大「文字を書く」、⁶³玉村文郎「書くことの意味—国語教育と日本語教育」、⁶⁴加藤彰彦「書くことについて

の問題点」、⁶⁵河原崎幹夫「カタカナの指導—外語の表記のしかた—」、⁶⁶別華薫「外国人の漢字学習における問題点」、⁶⁷石田敏子「コンピューターを利用した漢字の個別学習」の諸論をかかげた。このほか、⁶⁸Sumiko Horiguchi: Practice of Kanji with Overhead Projector、⁶⁹柴田俊造「非漢字系学習者に対する上級漢字指導法」(『講座日本語教育』14分冊、昭53・6)、⁷⁰武部良明「漢字の違いの問題点」(同)、⁷¹武部良明「漢字国民に対する中級漢字教育」(『日本語教育』37、昭54・3)があった。

一般社会向けの漢字に関する教養書も数多く出された。一部を挙げると、⁷²斎賀秀夫『漢字と遊ぶ—現代漢字考現学—』(毎日新聞社、昭53・3)、⁷³カマル社編『イメージの冒険3・文字』(河出書房新社、昭53・8)、⁷⁴松下史生『仮名づかいと似た漢字の誤典』(自由国民社、昭54・3)、⁷⁵江川清・霧岡昭夫『漢字雑学事典』(みき書房、昭54・7)などである。

国語審議会は52年1月「新漢字表試案」、54年3月「常用漢字表案」を発表した。これに対して、⁷⁶木村万寿夫「新漢字表試案について」(『国語国文学論集』八安田女子大V8、昭53・3)、⁷⁷西谷博信「新漢字表」と放送のことは(『NHK放送文化研究年報』23、昭53・7)、⁷⁸鈴木正明「当用漢字表および同字体表の変更の問題—新漢字表試案考—」(『印刷雑誌』61-8、9、昭53・8、9)、⁷⁹柴田武「ことはあつての文字—「常用漢字表」の場合—」(『月刊ことば』、昭54・6)などの論があった。このほかに意見を述べたものは多かったが、文字・表記論の立場からの論の少ない、あるいはないことが、残念だった。

漢字をふやす、あるいは減らすことが、文字論の上でどう位置づけられるのか、読み書きの行動の上でどのような得失を生むのか等について、多くのデータをもとに議論する必要があるだろう。そう考えると、③田中卓史「表記変容のシミュレーションシステム」(『計量国語学』11-5、昭53・6)、④田中卓史「漢字仮名まじり文」の変容」(『Lit』10-5、昭53・12)は、まだ小さな実験の段階ではあるが、注目される。

情報処理の分野では、漢字処理が盛んに進められている。つい十年前までは、コンピュータでは漢字は扱えない、いずれ機械が漢字を締め出してゆくだろうと考えられていたが、その見通しは修正しなくてはならなくなった。コンピュータが漢字を扱うことは、まだまだコストは高いものの、技術的には十分可能となってきた。情報産業は積極的に漢字を利用する方向に進んでいる。それならば、漢字をいくらでもふやしてよいものなのかどうか、あらためて議論されねばならない時期になってきている。53年1月工業技術院から、漢字六三三九字を含む標準コードが発表された。これについては、⑤西村恕彦「漢字のJIS」(『標準化ジャーナル』171、昭53・5)や、⑥無署名「漢字のJIS規格」(『計量国語学』11-5、昭53・6)、⑦田嶋一夫「JIS漢字表の利用上の問題——漢字処理システムにおける漢字のデザインと管理」(『情報管理』21-10、昭54・1)がある。また、情報処理に関しては、⑧石綿敏雄「カナ漢字情報処理」の問題点——自然語処理とカナ漢字変換——」(『情報科学』141、昭53・8)、⑨田嶋一夫「国文学研究資料館の利用と今後の課題——コンピュータ利用の問題点を中心として——」(『解釈』284、昭53・11)、⑩坂本義行「文節単位の自動分割法——字種と平仮名連系による——」(『計量国語学』11-

6、昭53・9)、⑪坂本義行「日本語の点字情報処理におけるカナ漢字変換」(『計量国語学』12-3、昭54・12)その他の発表があった。なお、⑫には、漢字の字種調査の結果として、『靈異記』は総字数四四三〇八、異なり漢字数二四五三、『弓張月』はそれぞれ二五一六五、二五〇九であり、共通する漢字は一四七三字との数字が報告されている。

文字の心理学的な研究も数多く発表された。⑬海保博之「漢字情報処理機制をめぐって」(『計量国語学』11-8、昭54・3)、⑭賀集寛・石原岩太郎・井上道雄・斎藤洋典・前田泰宏「漢字の視覚的複雑性」(『人文論究』八関西学院大V29-1、昭54・9)、⑮田中敏隆・安福純子「文字認知に関する発達(4)」(『大阪教育大学紀要』IV教育、昭54・2)、⑯田中平八「文字パターン認知の過程の構造について」(『人文学報』八都立大V133、昭54・3)その他の発表があった。

文字・表記の研究は、まことに多方面にわたってきている。この項に関わる研究百余編のうち、約三分の二は、国語学会会員以外のものであった。今われわれの課題は、日本語の実態を見据えた上で文字・表記の理論づけではないかと考える。

—— 国立国語研究所員 ——